育ちゆく花実の森 ⑥

春の里山は七変化

菅田忠志（生11：須磨区会）

6月を迎え、花実の森の木々の梢も、この春芽生えた新芽を大きく広げて太陽の光をいっぱい受け、光合成で作られる栄養素を幹の隅々まで送り込んでいることだろう。ついこの前まではバッサリと葉を落とし、木々の空間もすかすかの隙間だらけで、飛び交う野鳥も姿を隠すのに苦労していたが、今はもうその心配はしなくて済む。野鳥観察にはちょっと見にくい愛好家泣かせの季節。また、春の里山は次々と入れ替わって咲く花たちの出番の季節でもある。街中のサクラより一足遅れて咲くヤマザクラは、ここ“花実の森”の大家さん。幹の直径が30㎝を超すような大径木が何本あるだろう。すぐ傍の人目の高さで「見て見て！」と呼びかけて咲くコバノミツバツツジはこの森のおかみさん。林床に咲く草花たちも、それぞれ装いを着こなして順番通り規則正しく咲き始める。ホタルカズラの青い花、タチツボスミレのうす紫、キイチゴやクサイチゴの白い花、今咲き始めたうす桃色のササユリは、やはり花実の森のお姫様。そっと足を踏み入れ、語りかけてやってください。そう、春の里山は7変化で待ってくれていますよ。

＝写真は花実の森のお姫様「ササユリ」

北区会で農村歌舞伎を応援

新緑香る4月21日、北区上谷上の天満神社境内で農村歌舞伎が上演されました。演目は「修禅寺物語」と子供歌舞伎の「三人吉三」。地元民や観光客ら300人が詰めかけ、後方の立見席にはカメラの放列も。4年に一度の珍しい舞台は大入り満員です。

さて、写真の左から2人目は誰でしょう？　そう！この人は、斬られ役の兵士として、急遽、舞台に立つはめになった、「ぎゃらりーわ」のM編集長。「これがやみつきとなって、〈わ〉をなおざりにされませぬよう、しかとお願い仕りまする」。

北区近辺には４つの農村歌舞伎舞台があり、毎年、交互に上演会があります。上谷上の舞台は県の重文で間口約12m、奥行き約6mの萱葺きで1860年代に建てられたものです。演ずるのはボランティアの「神戸すずらん歌舞伎」グループ。ＫＳＣ関係者も3人が所属しています。この日は、北区会の呼びかけで10人ほどが見学に訪れました。重厚で格式ある舞台、きらびやかな衣装、仲間たちの熱い演技…おひねりが飛び交い、温かい声援と感動の拍手が舞台を盛り立てました。郷土に残る貴重な文化遺産＝農村歌舞伎を見守り、育てるのも〈わ〉の使命の一つではないか、と舞台に見惚れながら思ったことでした。

（広報・徳原尚世）

皆で声援「フレー・フレー灘区会」

灘区会では毎週木曜日に、市立青陽東養護学校小学部で図工授業のサポートボランティアを5年ほど続けています。メンバーは飯井冴子さん（一般）ら5人。1回に3人ずつのローテーションを組み、授業の準備をして、子どもたちが絵を描いたり、工作をしたりするお手伝いをします。いっしょに授業をうけていると私たちもとても楽しくなります。6月8日は運動会。私たちボランティアもお誘いを受け、応援に行きました。暑い陽射しの中、小学部から高等部まで、全校あげて元気に競技や演技に熱中する子供たちに感激。「がんばって！」日ごろ親しい子たちには、思わず大声をはりあげてしまいました。

（道井紅：福17）

●野鳥に足環：野鳥と自然観察会では、昨春に続き、しあわせの村内に飛来するシジュウカラのヒナ45羽に足環を装着しました。昨年足環を装着した34羽はどこへ？まだ情報はありません。

（野鳥と自然観察会代表：茅中英一）